

夜明けの為の物語

蛍石/ラディッシュ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「皆で綺麗な日食を見てみたい！」

始まりはそんな小さな願い事から。魔道士の卵であるアミティは、それを叶える為に、自分の身の丈を超えた難題に挑む。

協力するのは何時もぼんやりしているシグと、嫌味などところもあるけど頭の良いクルーク。

三人の挑戦は果たして実るかだろうか？ 揃いも揃って顔色を苦くする中でも日食の日は近づいてくる。すると、三人に何やらおかしな事が起こり始めて――。

これは、置き去りにしていたものと出会う話。
加えて、忘れていたものを思い出す物語だ。

目次

最初の一枚目	1
まずは知ること	11

最初の一枚目

プリンプ魔導学校。言わずと知れた、多くの魔導師の卵が集う学舎まなびやだが——今日に限ってはより一層の賑わいを見せていた。

どの教室もたくさんの生徒達が共通の話題のもと、雑談を交わしている。

学校で優秀な成績を収める紫帽子の生徒は、とりわけその話題に興味を惹かれているのか、多くの同級生の前で自らの知識を以って弁舌を振るっていた。

それなりに頭の良い者はその話に目を輝かせているが、そこまで良くない成績の持ち主は「なんか凄いことが起こるんだ！」と取り敢えずはしゃいでいる。

三者三様のお祭り騒ぎ。教師達も今日ばかりは多めに見ているのか、騒ぐ生徒達への叱責は無い。

まるで祭りの前のように賑やかな学校。おそらくこの喧騒は授業が始まるまで続くだろう。

……とある教室では、ただ一人だけこの騒ぎに加わっていない者がいた。

彼は席にいたまま、ぼんやりと虚空を見つめている。

同教室にいる同級生——赤ぶよを模した帽子とハネた金髪が特徴的な少女は、彼を

見て呆れ半分に笑った。

ぼんぼん、と少女の左手が淡々と虚空を覗く生徒の青い髪を叩く。

そうして、やや強い語気で叱るように。

「シグ、もうすぐ朝礼だよー？ 起きないと、またアコール先生に怒られちゃうよ？ 起きて起きてー!!」

「……………」

シグと呼ばれた生徒は、赤と青のオッドアイを開いたまま微動だにしない。金髪の生徒に「起きないと」と言われたが、その通り彼は目を開けたまま寝ていた。

肩を掴まれがくがくと揺さぶられてから、シグはキョロキョロと周りを見る。

そうして、眠たげな声で一言。

「…アミティ、今なんじかんめ？」

やる気とか、熱意とか、そういういったものから程遠い声。

あくびを一つ。寝起きそのものみたいな振る舞い。

彼の発言に、アミティと呼ばれた赤ぶよ帽子と金髪が特徴の少女は絶句したように目を剥く。

「まだ朝礼もやってないよ!? …もしかして、学校が終わるまで寝るつもりだった？」

「……………どーでしょー」

ふい、と露骨に視線を逸らすシグ。

それを見たアミティがガツクリと肩を落とした時。

「皆さん、おはようございます」

「おみやーら、さっさと席に着くみや」

教室の戸が開き、長い紫の髪を持つ若い見た目の女性が入ってくる。彼女はぬいぐるみのような黒い猫を抱えており、その猫は喋ると来た。猫は奇妙な口癖と共に、談話中の生徒たちを着席へと促した。

「今日お休みの子は……いませんね。それでは、朝礼を始めます」

同時に、学校の鐘が鳴った。

本日の学業が始まった事の合図だ。

鐘が鳴って、机に突っ伏して眠りこけていた生徒が跳ねたように起き、それを見て周りがクスクスと笑う。

それを見てから紫髪の女性が口を開く。

「皆さん、もうすぐ日食の日が来ます。大きなイベントで楽しみなのはわかりますけれど、それで事故に巻き込まれたりしないよう気を付けて下さい」

「アコール先生！ 日食は直に身ちやいけないって本当ですか？」

「はい。その通りですアミティさん。目が見えなくなるかもしれないかもしれませんが、皆さんも

日食を見る時はちゃんと道具を用意してくださいね？」

ガタツと勢いよく席を立ち、元気な声で質問するアミティに、紫髪の教師——アコールは和やかな声で返答する。

応答してくれたことに感謝を述べつつ、再度着席するアミティ。彼女はその時から「確かあの本に……」と何やらぶつぶつと呟き出す。

周りの席の生徒達は特に気にしなかったが、それが元で注意をもらった金髪の少女だった。

最後の授業を終える鐘が鳴る。連絡事項も伝え終わって、教室には遊びの約束や雑談をする生徒達がいた。普段ならアミティもその例に漏れないのだが、今日に限ってか彼女の姿は教室になかった。

皆が「珍しいこともあるものだ」と不思議に思う中、廊下から何かにぶつかる音と恐ろしい怒鳴り声が響いてきて「ああ、いつも通りだ」と安堵していた。

失礼な安堵をされていることなど知らず、アミティはプリサイズ博物館に来ていた。

この博物館は、数多くの書物や歴史的資料が集っており、ここプリンプに住む数多の人々が訪れる。

アミティは、そんな図書館じみている「過去の置き場所」に蔵書されている本の一冊

の、とあるページを穴が開きそうなほどに見つめていた。

そんな彼女の耳に、聞き覚えのある二人の声小さく聞こえた。

声につられ、その方向に首を向けてみる。

「日食と虫の関係？ そんなのあるのかい？」

「なんとなく、あるかなーって思ってた」

そこにいたのは2人の男児。1人は紫を基調とした服を見に纏っており、もう1人は空色の髪を持ちぼんやりとした印象を抱かせる。

2人とも、アミティがよく知っている男の子だ。2人の方もアミティに気づいたのか、即座に声をかけてきた。

「あれ、アミティ？」

「君が博物館に来るだなんて…明日は雨でも降るのかな？」

小首をかしげた空色の髪少年は「シグ」

やや嫌みのある言葉を吐くのは「クルーク」だ。

シグは虫を一等好むため、虫に関する本を何冊も読破しており、虫に関する知識は他の追随を一切許さない。

クルークはプリンプ魔導学校で好成绩の証である「紫帽子」を貰っている。そこには無数の本による知識が土台として存在している。彼が博物館にいるのは、つまりそう

いうことである。

「ちよつと調べ物。シグとクルークはどうしてここに？」

「僕は日食について復習をしようと思つてね」

「日食で虫に何か起こるかどうか調べてた」

二人は各々好き勝手に本を読み漁っていたらしいが、途中で出会つてからはお互いにどんな本を読んでいたかを喋っていたとのことだった。

クルークはアミティが読んでいた本に目を向けると、物珍しげな顔をする。

「これは……魔導具についての本かい？」

「うん！ あたし、これを作ろうと思つて」

ばさつ、と本を開きアミティは自分が作ろうと思つている魔導具（魔導に関するアイテム、ツールのようなもの）について記したページを、目の前の二人に対して見せた。

魔導具：天文分野

空に在る星々は我々に大きな恩恵をもたらします。占星、祈祷、星読、儀式とその用途は様々ですが、先ずは星について知ることが重要です。手始めに星見の道具を作りましょう。眼を凝らし、空とあなたの世界を繋ぐのです。

・望遠鏡類・

第一種：空鏡の望遠鏡

空鏡の望遠鏡は、星見の道具の中で最も初歩的な道具です。星の魔導に進む者であれば、この道具の作成は避けては通れません。失敗を恐れず挑戦しましょう。

空鏡の望遠鏡はあなたに極上の星空を提供します。またそれだけではなく、この望遠鏡はあらゆる天体を鮮明かつ安全に見ることが可能です。初歩として星を知るには正に最適と言えるでしょう。

この道具の作成には、月の石の粉、セレスタイト、各種元素によって作られたレンズが必要です。まずは材料を揃えましょう。(次ページに続く)

「今度の日食って、中々見れないらしいから、皆で一番綺麗なのを見てみたいなって」
「……これ上級生が作るものじゃないか。」

君がやっても、成功するとは思えないけどね」
「うっ……………」

少女の願望を、少年の現実を見据えた発言がグツサリ刺した。思わず肩を下げた。うアミテイの表情は悔しげだ。

どうにか出来ないものだろうか、と彼女は必死に考えてみる。今回の日食は、次がい

つ来るか分からないとても貴重な現象なため、出来るだけ綺麗な形で目に収めたい。

そして友人達とその光景を分かち合いたい。願望を諦めきれず「うー、うー」と呻く少女だったが、そこにシグの声が割り込む。

「メガネ、これって遠い星も見える？」

「ん？　そういう道具なんだから、見えるに決まってるだろ」

極わずがな質疑応答を終えれば「よし」と、呟いてから満足そうに頷くシグ。彼は青い髪を揺らし、アミティの方に顔を向ける。いつもと変わらずぼんやりとしていて、変化にも乏しい表情のままあか弾んだ声で提案した。

「アミティ。その道具、一緒に作ろう」

「シグ……」

まさかの助け舟というか、協力者の誕生に目を輝かせるアミティ。それに驚いたのは、シグの性格をそれなりに知っているクルークだ。

「シグ……どうしたんだい急に!？」　虫以外は「へえー」とかで流しかねないのに!」

「青い星もあるって聞いた、それが見たい。青は海だし、空だし好き」

「……青い星……青色輝巨星のことかい？」

「何それ？　知ってるの？」

「……今度本を貸すから読むと良いさ」

思いの外真つ当な動機に面食らうメガネの少年。やや食い違いがありそうだが、今は置いておくことにしたのか、クルークはそこまで深く踏み込まなかつた。

ただ、彼はシグがアミティに協力する事が確定した瞬間、頭痛に苦しむかのように肩間に手をやる。

顔つきは苦虫を噛み潰したように渋く、彼は恐る恐ると二人に聞いてみる。

「しかし…本当に君達だけで作るつもりなのかい？」

「え、そうだけど…」

「問題、ある？」

とうとう彼はこれ見よがしにため息を吐く。

それも然もありなん、アミティもシグもお世辞にも成績がいいとは言えないからだ。そうともなれば、クルークは内気が気ではない。

——不安だ…！ 果てしなく不安だ…！ 火事場の馬鹿魔導力かつミスが多いアミティに、授業は寝てばかり、かつ何時もぼんやりしているシグ！ この二人だけにやらせたらとんでもない事が起きるに決まってる…！

頭をよぎるのは大爆発する二人と周囲。そうでなくとも何らかの失敗で起きかねない惨事を予想して、クルークは決心を固めた。

彼は重々しくため息を吐きながら、身体中を重そうにしながらも、一つの提案をする。

「仕方ない……この僕も手伝つてやる」

「本当!? クルークも手伝つてくれるなら、頼もしいよ!」

「お……、思わぬ助っ人……」

本来なら厳肅であるはずの博物館は、子ども達のおかげですっかり騒がしい。

しかし咎める声は無い。ただいつものことか、と穏やかに眺める目があるだけだ。

暑過ぎず、寒過ぎずな過ごしやすい季節。三人の魔導師の卵が、それなりに大きな試みを胸に、それぞれ不安と期待を抱く。

それは大事の前触れか、それとも事件の前兆か。

どちらにせよ、平穩無事に終わる事はないだろう。

これは、発端こそ些細であるが、盛大な終わりを迎えた一つの思い出話だ。

まずは知ること

ともかく、何を作るにしても「完成品」と「材料」についてよく知ることが重要だ。
魔導具…マジックアイテムを作る際には特に。

材料の性質やその他諸々を把握しないで大雑把に扱えば、爆発などを初めとした事故が起ころ。

また、完成品のことをよく知らないまま作れば、とんでもないものが出来上がったたり、用途と全然違うものが完成したりする。

そんな不安もあって、クルークはアミティとシグを改めて博物館に集め、皆で作ろうとしている。「空鏡の望遠鏡」について色々と把握する機会を設けた。

相当騒がしくなるだろうなと思ったのか、博物館の館長は黒板付きの一室を三人に貸している。

「二人とも…ちよつと期間が空いたけど『空鏡の望遠鏡』の材料はちゃんと覚えてきたんだらうね？」

「もちろん！ セレスタイトと、月の石の粉とあとえつと…」

「各種元素それぞれ5グラム」

「それ！」

どうやら二人とも概ねしつかりと覚えてきたらしい。満足そうに頷いた紫帽子の少年ことクルークは、意地の悪い笑顔を浮かべながら皮肉げにこう言い放った。

「流石にこれぐらいは覚えられたようで安心したよ。ここでつまづくようじゃ目もあてられ無いからね」

「えへへ〜」

「アミテイ、褒めてないからな？」

咳払いの音が響く。気を取り直して、クルークは黒板の前に立った。チョークを手に、簡単な図形を描く。

それは八つの丸と、水と火と風と土と光の記号。

記号の方は相関図のようになっており、水と火と風と土の記号を矢印が繋ぎ、菱形を形成していた。

その菱形の中心には、光の記号が据えられている。

八つの丸の方はそれぞれ色分けされており、その大きさも個々によって違う。

とりわけ大きな赤い丸を、それぞれの色を持つ丸が囲むような形となっている。

そこまで描き終えて、クルークはチョークを置いた。白や赤といった粉にまみれた手をその場にあった布巾で拭いつつ、二人の方へ振り返る。

「よし、じゃあこの魔導具について説明だ。このボクが説明するんだ、寝たりなんかするなよシグ」

「大丈夫、ここに来る前だけどコーヒー飲んで来た」

「……………とにかく、説明しよう」

クルークの指が先ず菱形の図形を示すと、自然とアミテイの緑の目も、シグの赤と青の目もそちらを向く。

「五大元素はこの前授業でおさらいしただろうか？」

「えっと、魔導の基本で…火と水と風と土と…あと…エーテル…だっけ？」

「そうだ。ま、これくらいは覚えておいて貰わないとね」

此処——プリンプの魔導は、個々人によつて千差万別。作成方法を学校で習い、皆思い思いの魔道を作る。

例えば生徒が嫌がる概念を魔導として組み立てたもの。

他には、色を基本に構成されたもの。

さらに言えば風に焦点を当てて作られたもの。

このように魔導・魔法の形は様々だ。中には生まれつき幾つかの魔導を支える者もいる。

そんな魔導だが、基礎・基本となるのは“五大元素”と呼ばれる五つの属性である。

火、水、風、土、エーテル。どんな魔導もこの五つの元素の内、いずれかに沿ったものだ。そこから逸脱する事は、まず有り得ないと言えるだろう。

別世界の魔導ともなれば、違うのだろうか。

ともかく、此処の魔導とはそういうもの。定められたルールがあり、それを遵守させずれば、どんな魔導も努力次第では作れてしまう。

「五大元素は、エーテルを除いて全部自然にある物だ。これは上級生で習うところだけど、エーテルは天体を表す物質で：火や土などで説明できないものを説明する元素、そこには無いけれど確かにそこにあるもの、といったところかな。『空鏡の望遠鏡』ではこのエーテルと他の全属性が：」

「ちよ、ちよつと待つてよクルーク!! いきなり難しくなつてついていけないよ!」

「アミテイ、おちつけー」

「ああ、アミテイには難しすぎたかな?」

いきなり複雑さを増した情報に、頭から煙を出しそうなほどパニックになるアミテイ。

クルークはともかくとして、シグですらそんな彼女とは打って変わって落ち着き払っている。

よく補修で顔を合わせる青髪の少年が、まるでクルークの説明を理解しているかのよ

うな顔をしていて、アミティは驚きのままに叫ぶ。

「シグはわかるの!？」

「大体だけど、分かってる」

「そう言えばシグの使う魔法も基本はエーテルだったか……。ああ、ちなみに僕の天体魔法もエーテルが基本さ」

「ますます何なのか分かんなくなつて来たよ……。シグの魔法つて青色ばかりだったよね……。でもクルークの天体魔法と基本は同じ……。うわーん！ エーテルつて何!？」

すっかり頭をパンクさせてしまったアミティ。両手は赤ぶよを模した帽子上がつており、頭を抱える形になっている。顔は言わずもがな苦悶に満ちていた。

クルークもまた頭を抱えた。どうやって説明したものか、きちんと理解してもらわなければ恐らく大惨事に発展するし、そもそも目標の魔導具が作れない。

悩みの沈黙が部屋を支配する。何となく喋りづらい雰囲気。

そんな中でも相変わらず、ぼんやりとした青い髪の少年——シグは、普通な方でこめかみの辺りをかいていた。

そんな彼だが、ふと思ひ至つたかのように顔を上げる。何かに気付いたような面持ちで、アミティに顔を向けて口を開く。

「アミティ、画用紙みたいな感じだ。何でも描けるし塗れる」

「あ、ちよつと分かつたかも」

「ふむ…シグにしては良い説明じゃないか」

悩みが氷解したような空気。実際、シグの比喩は間違っていない。エーテルとはそういうもの。無色透明で、火水風土では表せない物を表せる万能な系統。

シグの言は間違つてもいなかったので、クルークはまあそうだなと頷く。アミティはこちらの説明の方が理解しやすかつたのか、仕切りに何度か頷いていた。

「ま、話を戻そうか。天体にも一応属性がある。火星には“火とエーテル”みたいな感じにね。

空鏡の望遠鏡のレンズに五大元素が必要となる理由がそれになるね。見たい星の属性と、レンズの属性を一致させる。するとレンズの方の属性が呼び水になって、より鮮明に視界と天体が繋がるのさ」

「一緒だから引き合うってこと？」

「概ねそうだね」

ここまで説明して、ようやく二人は“空鏡の望遠鏡”について理解する。

アミティは魔導具について記された本を開く。わからない事ばかりだったそれは、今や何とか理解できるものと化していた。

それは紛れも無く、ここにいる二人のおかげだろうと口元を綻ばせる。あとでちゃん

とお礼を言わなくちゃ、と思っていたその矢先、アミティは一つの項目に疑問を持った。

「んー…？　じゃあ、このセレスタイトってというのはどうして使うんだろう？　普通のレンズを使つちやダメなのかな？」

クルークの説明であれば、レンズに元素を練り込めば良いだけの話だ。あとは月の石で、透明度を高めれば完成する筈である。どうしてわざわざセレスタイトというか、レンズでもない鉱石を使うのだろうか？

顎に手が行き、小首を傾げる。

ただ、この疑問の氷解は、予想以上に早いものだった。

「セレスタイトは、天の青石って意味。空っていう意味があるから、こつちと空を繋げるものに使うのが一番…だったけ？」

「…シグ、キミ頭がいいのか悪いのかどつちなんだい？」

クルークが訂正をしないということは、そういうことである。どうもシグの持つてる知識はかなりの偏りがあるらしい。学校の成績が芳しく無いのも、それなりに納得出来る実情だ。

頭痛がするかのようには頭を抱えるクルークだが、やっぱりシグはぼんやりとしたままだ。

そんなこともあつたが、魔導具に關してはこれで大体理解できたと言えるだろう。何度かおさらいに本を読み直すアミティだが、そこに理解できない故の悩み顔は無くなつていて、代わりに自信に満ち溢れた顔が現れていた。

「なるほど……。あたし二人と一緒に何だかいけそうな気がしてきたかも！ クルークもシグもありがとう！」

アミティは満面の笑みで本を掲げる。嬉しさから来る行動だろう。

窓から刺した陽光が、本の表紙を光らせる。色は透き通つた橙色で、日が落ち始めたという事を皆に知らせてくれる。

感謝の言葉への反応は人それぞれだつた。腕を組んで「別に」と言つた態度を取つたり、変わらずぼんやりとしたままだつたり。何方にせよ、邪険に扱われる事はないのは、彼女特有の明るい雰囲気のせいかもしれない。

一通り物事を終えれば、黒板を消したり本を返したりと後片付けをこなす。

片付けが終わる頃には、すっかり夕暮れ時になつていた。清々しく、しかし何処か感傷的な夕陽を受けながら、三人の子どもは帰路に着く。

地に伸びた真つ直ぐな影が、くるりと振り返る。

その影はアミティのもの。彼女特有の外ハネを持つた髪が判別を可能にしている。

「ちよつと息抜きにぶよ勝負しようよ！」

アミティは微笑みながら提案した。

ぷよ勝負とは、「ぷよ」という生物を用いて行われる勝負だ。このぷよには赤、青、黄、緑、紫の種類が存在し、更にその同種のぷよを四つ以上そろえると消滅するという現象が起こる。

この消滅の際、不思議な力が発生する。それを用いて呪文をぶつけ合うのがぷよ勝負だ。

もちろん、そのまま呪文をぶつける訳ではない。呪文の威力は「おじやまぷよ」というものに換算され、相手に降り注ぐようになっていく。

「やろう」

少女の提案に、最も早く賛成したのはシグだった。普段のぼんやりさをかけらも感じられない勢いで、彼はどこからとも無く大量のぷよを用意する。

クルークはそんなシグの手際の良さに、呆れ混じりの反応を見せるが、彼も彼で大量のぷよを準備済みだった。

そんな時だ。

「ぷよ勝負の時はやる気に溢れるな、シグは…」

「ぷよは楽しくなれるから好——ッ!?!」

ズキリ、と不意にシグの頭で頭痛が走る。

よほどの激痛なのか、彼は頭を咄嗟に抑える。それどころか、姿勢を崩し、片膝で立つことを余儀なくされた。

ぐしゃり、と空のように青い髪が紅く、鋭い左手でぐしゃぐしゃになる。頭痛は治らないまま、目眩にも似た視界の白化を少年は体験する。

“これなら、皆傷付かないで済むと思う。”

“貴方は…、優しい子ね。”

ザリザリとした声が聞こえた気がする。砂と砂を潰し合わせているみたいな音。何を言っているのか、全くわからない。

そもそも誰の声なのかもわからない。頭痛が更に悪化する。息も絶え絶えに荒くなってきた、意識も次第にぼんやりと薄くなり――

「シグ!!」

その寸前で、一気に意識が戻る。

声だ、二人分の声がシグを留めた。

「だ、大丈夫!?! すごく辛そうだよ…?」

「風邪でも拗らせたんじゃないだろうね…早く家で休んでくれ、ボクにうつされたらたまったものじゃない」

冷や汗が、伝う。

ぴとり、と青色が頬に張り付く。

「…大丈夫、問題ない」

ゆっくりと身を起こした。身体に問題はない。痛みが引けば、何もおかしなところはない。

何度か服についた土を払い、深呼吸。

それだけで、ほら…元どおり。

「本当？ 無理してない？」

「うん、心配ない」

覗き込むアミティに、シグはいつも通りの声で返す。

未だ不安そうな二人だが、本人が大丈夫なら大丈夫なのだろうと判断し、結局ぶよ勝負を催す事となった。

とは言えども、少しでもシグにおかしなところがあつたら、即刻家に返すことを取り決めてからだ。

空色の髪をした少年は考える。確かに聞こえたあのザリザリとした音は何だったのだろうか？ あれは、彼自身初めて見た未知であつた。不安はあるが、しかしそれ以上に——彼の心中を疑問が満たしていた。

しかし、まあ良いかと、彼は沸いた疑問を押し潰す。

深く考えず、友達とぶよ勝負に精を出す。楽しければ、悩むこともない。あつという間に笑顔になった三人の子どもが、そこにはいた。

「いっくよー！ アクセル！ フ・フレイム！」

「何の！ プロミネンス!!」

「…シアン、セルリアン！」

日食の日が近い。街の様子も随分と様変わりする。

普段の長閑な姿はそこになく、代わりに祭り前のような慌ただしさと、活気に満ち溢れていた。